

パネル

生命倫理という宗教性

——中国の事例をめぐる初歩的検討——

池澤 優

本発表では、中国大陸における生命倫理の言説を題材として、それを現代における広い意味での宗教性と見る視点から、その歴史的・文化的文脈について考えたい。

中国における生命倫理の言説も多様であるが、他の国のそれと比較して乱暴に概括するなら、以下のような顕著な特色がある。まず、人間を何らかの「全体」（社会、国家、人類）に所属する社会的属性によって規定し、「全体」に寄与する点に価値を見いだす「全体主義」的傾向。第二に、技術による自然の改変と人間身体への介入を、それが「全体」の福利を増進する限りにおいて容認する技術肯定的傾向。第三に「全体」の質を上昇させることを個人の意志に優先させる、優生学的傾向である。但し、この「全体主義」は「全体」の内実が何であるかによって、様々な現れ方をする。「全体」が民衆を指す場合には、医療技術の使用を民衆の価値観に従わせることで、暴発を止めるくびきになるし、「全体」のための倫理的営為を要請する原動力になる「全体」が国家を指す場合には、政策（例えば「計画生育」）を是認する論理として働く。

このような中国的生命倫理の特徴は、近代科学が伝統的な考え方の枠組みを通して吸収されたプロセスの産物であると言える。

。ここでの伝統的な考え方とは、主として儒教により体现される、全体論的宇宙観と呼ばれるものである。この考え方の中では万物は「気」から構成され、人間と自然、身体と精神の間に本質的な分断は存在しない。「気」による万物の生成・変化は、宇宙の主宰者としての「天」により司られ、人間は修養により「天」賦の人間性に目覚め、それを人間関係において実践し、最終的には宇宙全体に道徳性を実現することが責務とされた。内面的修養と社会実践は連続体を構成していたのであった。

近代に入って、この考え方は大きな変容を蒙るが、近代科学はこの考え方の枠組みを通して吸収された。それを典型的に示すのが、遺伝と進化がラマルク説—環境決定論と後天的資質の遺伝の考え方—を通して理解された点である。生殖が環境や生活態度により左右されると考えられたことは、個々人は全体（国家）のために自制によって「劣性」の発現を予防する義務があるという主張を導き、また国家の概念が「天」に取って代わったことで、国家が全体（大衆）のために個人の生殖に介入する権利を有すると主張されることになった。かくして、一九二〇年代に都市のエリート層を中心に「優生」の概念が定着する。

中国共産党は当初、優生学と遺伝学を階級支配的科学であるとして否定していた。代わって持ち込まれたのがルイセンコ学説である。ルイセンコ学説はラマルク説と同様に、全体論的宇宙観と親和的な要素も持っていたが、環境の人為的操作を通して生物の種をコントロールし、支配することを主張していた。

パネル

技術の自然と身体に対する介入を積極的に評価する傾向は、この段階で一般化すると考えることができる。

一九七六年の毛沢東の死後、鄧小平の下で改革開放政策が採られると、正統的な生物学（遺伝子学）が復活するが、それは遺伝子が「劣性」の資質の原因であり、それを除去することを主張する優生学的な言説を大量に生み出した。現在の中国における「計画生育」政策は強制力に基づくものであるが、その背景には、民間レベル、特に知識人の間での優生思想への広範なコンセンサスが存在するのである。

つまり、中国においては、全体論的宇宙観という宗教的な思考を通して近代が吸収されると同時に、その過程で全体論的宇宙観自体が変容し、現在の生命倫理言説に至る考え方を生み出したのである。それを一つの宗教思想として分析するという視点は、必然的に、中国的な生命倫理言説を歴史的に相対化することに繋がるであろう。

パネルの主旨とまとめ

安 藤 泰 至

近年、本学会においては生命倫理に関係した研究発表が増えている。しかし、「宗教と生命倫理」というテーマは、「宗教」「生命倫理」というそれぞれの語に複数の意味や次元があるだけでなく、生命倫理自体が学際的な分野であることや、（広義

の）宗教学には固有の方法論がないことなどによって、議論が拡散し、かみ合わないことも少なくない。本パネルの目的は、宗教が生命倫理についてどのように発言できるか、という通常の問いを裏返して、生命倫理について語ること（あるいは語れないこと）が宗教や宗教学にとってどのような意味をもつか、という問題設定をとることで、宗教と生命倫理をめぐる問題を整理しつつ、そこに多様な議論の土台となる共通の基盤を探ることにあつた。四人のパネリストはそれぞれ、キリスト教（土井）、仏教（佐藤）の立場から、宗教に依拠せずに生命の価値の問題を問おうとする生命学（森岡）の立場から、実証的宗教学（池澤）の立場から、生命倫理の問題がそれぞれの研究や実践にどのような問いを投げかけているのかについて発表を行った。土井健司は、生命倫理の問題が医学研究や医療の場において忘却されてきたのは誰かという問いを根本にもっており、生の周縁にいる人々への忘却を回復するという方向性を帯びているとすれば、歴史的にキリスト教躍進の大きな原動力となつた隣人愛やフィランソロピア（人間愛）といったキリスト教思想がいま一度試されているのではないかと論じた。佐藤雅彦は、生命倫理の問題に答えるのは、仏陀の教説それ自体やその手がかりとなる仏教経典ではなく、仏陀の教説を「このように受けとめさせていただく」という姿勢で具体的な現実に関わっていく「宗教家」であるとし、誰もが救われる仏教を標榜するのであれば、賛否両論ある生命倫理問題に答える際には、是非論を超えた発言を用意すべきだと述べた。こうした宗教サイドからの二人の提題に対し、森岡正博は、臓器移植法改正をめ